

# 『入菩提行論』における「空性の修習の勸奨」

——敦煌出土初期本から現行本への展開——

櫻 井 智 浩

## はじめに

シャーンティデーヴァ造『入菩提行論』(BCA)は、一般に中観思想にもとづいた実践を説く書として周知されている。その内容の重要性のためか、この論に対しては、インドに限らず、チベットにおいても数多くの注釈書が著されている。研究史の上でも、比較的早い段階で梵本が発見されたことで、その研究も古くから行われている。しかし実践的というその論の性格は、この書の場合、思想を体系的に説くものではないことを意味する。事実、文脈上、論の飛躍<sup>①</sup>としか思われない議論が唐突に表れる箇所も散見される。このような論構成も手伝って、そこに説かれる実践の内容と中観哲学との必然的な関係といった未解明の部分が残されている。

一方、同一起源を持つと考えられながらアクシャヤマティ造とされる、敦煌出土の所謂初期本(BSA)の発見は、これまでのBCA研究、ひいては中観思想研究にも再考を促すものである。齊藤博士によるその最初の成果の中では、BSAの方がBCAに先行し、より原型に近いものであると推測されている<sup>②</sup>。この推測は、シャーンティデーヴァ本来の思想を探るためだけでなく、BCAの成立事情を探るのにも有効である<sup>③</sup>。前述の論構成の問題も実践書という論の性格だけでなく、この論の成立事情にも関連するものだろう。

これまで、筆者は、おもにBCAに対するチベット撰述注釈書を中心として検討を行ってきたが、それらの検討結果を齊藤博士の推測に基づいて整理、再検討することによって、BCAそのものの特徴の一つを明らかにすることにし

たい。結論から言えば、BSA と BCA ではほぼ対応すると見られる、一つの偈中のわずかな表現の相違が、それぞれの論構成の相違、さらには各注釈書の注釈内容に影響を与えていると考えられる事例が存在する。それは空性の修習を勧奨する、その導入部分に窺える。

本論では、まず、相当箇所 of BSA と BCA との対照比較を行い、その異同と BCA の論構成との関係、更に各注釈書への影響を検討したい。

### 導入部分の異同

まず、相当箇所 of BSA と BCA との異同を検討する前に、ここまでの般若章<sup>④</sup>の文脈を紹介すると、智慧の生起の必要性を説き、二諦説を提示した上で、幻の比喻と自己認識理論批判を通じて一切法無自性空性を論証し、その獲得のため空性の修習の必要性を説いている。この構成自体は、BSA, BCA とともにほぼ一致している。

これに対して、空性の修習を勧奨する説示は、BSA では30偈～34偈に相当し、議論の導入的役割を果たす30偈、大乘仏説論争である31～33偈、結論である34偈から構成されるが、BCA では空性の修習の勧奨という主題のもと、42偈～44偈にほぼ同様の大乘仏説論争を含みながらも、構成は大きく異なる<sup>⑤</sup>。

まず、BSAにおける空性の修習の勧奨の導入部分を示そう。今回問題にする31偈のみ、チベット訳も併記する。

(BSA30=BCA55)<sup>⑥</sup>

〔主張者 アクシャヤマティ〕

なぜなら空性は、煩惱と所知の障碍の闇に対する対治だからである。

一切智者性を望む者が、どうしてそれ〔空性〕を速やかに修習しないだろうか。

(BSA31ab, BCA. missing. BSA31cd, cf. BCA41cd)

〔主張者 毘婆沙師〕

lam 'di nyid kyis 'tshang rgya zhes//

brtsan pa'i\* lung las 'byung ba yang//

yang dag man ngag brgyud pas shes//

khyod kyi gzhung gis ci ltar 'grub//SAITO [2000] P53.

\*(sic.) btsan; ādeya

「正にこの道によってこそ、菩提がある」という、信受された (\*ādeya) 経に言われているにしても、正しい教法の伝承によってである、と君の経論については、どうして証明されようか。

次に、BCA における空性の修習の勧奨の導入部分を示すが、BSA30 偈と同一の偈が、BCA では55偈にあたり、この説示の結論となっている。この偈に  
かわり、BSA に完全一致するものがない BCA41 偈が論の導入の役割を果たしている。このうち、内容的に BSA3lab 句との関連が窺われるのが、BCA41cd 句である。

(BCA41ab, BSA, missing. BCA41cd, cf.BSA3lab)

〔主張者 毘婆沙師〕

satyadarśanato muktiḥ sūnyatādarśanena kim/V. ed. p. 202. l. 20

bden pa mthong bas grol 'gyur gyi//

stong nyid mthong bas ci zhig bya//

〔四聖〕諦を見ることから〔こそ〕解脱があるが、空性を見ることに何の必要があろうか。

〔主張者 シャーンティデーヴァ〕

na vinānena mārgaṇa bodhir ity āgama yataḥ//41//V.ed. p. 203. l. 3

gang phyir lung las lam 'di ni//

med par byang chub med par gsungs// Der. 32a7, Pek. 36b7-8

「この道以外に菩提はない」と言う経言があるから。

一瞥して、「『この道』によって『菩提』がある」と説く経があると言う、同じ内容が BSA3lab 句、BCA41cd 句とに含まれることが分かる。このことから、それらの原型にもこの内容は存在したと考えられる。しかし、比較検討するにあたっては、次に挙げる点が注意されるべきである。

まず、一つ目の問題は、この主張がアクシャヤマティ/シャーンティデーヴァ

ア、反論者の何れの立場を表すものであるか、と言う点である。

BSA31ab 句について、これが小乗側からの論難である場合、「この道」とは直前の「空性の修習」を示すものであり、「経」も、それを説く大乘經典のことを指すと考えられる。これに対して、大乘經典については、小乗側におけるような「教法の相承」によって裏付けられているかが疑われていることになる。この場合、「教法の相承」(man ngag brgyud pa)は、小乗側の立場から、大乘を非仏説として峻別する一つのメルクマールとなっている。

一方、後者の場合、「この道」とは、八聖道と言った、小乗側の修道を示すものであり、「経」も、釈尊からの「教法の相承」による小乗側の阿含である。この場合は、「経」を仏説とする、「教法の相承」のメルクマールとしての正当性そのものが疑われていることになる。

このように、「この道」、更にそれを説く「経」、「君の經典」が、それぞれ何を意味するかによって、この偈の意味合いは変わってくるのである。BSA 注釈書は、この BSA31 偈をアクシャヤマティからの主張と捉え、小乗の阿含についても仏説かどうかは確認できないことを指摘したものと了解する<sup>⑦</sup>。何れにせよ、この「経言」が、小乗側、大乘側の何れによっても、自派の經典を意味しうる両義性を持っていることに着目したい。この「経言」の両義性は、BCA にも保たれているのである。

BCA41ab 句は、解脱への道として釈尊直説の四聖諦を見ること、即ち、見道、修道のみを認め、空性の見の必要性を認めない反論者の論難であり、BCA 独自の要素として見なしうる。しかし、このような論難は、当時既にあった一般的了解を反映させたものであったと思われる。実際、『中観心論』「声聞真実決訳章」第3偈から第8偈にかけて、大乘の説く八聖道以外の修道を正しい道諦ではない、また別の道を説くから、大乘は仏説ではない、という小乗側からの論難が取り上げられており、修道と空性との関係を巡る論争が既に存在していたことが知られる<sup>⑧</sup>。

これに対し、注釈書の解釈を交えず文脈を素直に読めば、BCA41cd 句は「諦を見る」という「この道」が、小乗の「経言」に説かれているから、とい

う前半の毘婆沙師の論難の理由であると考えられる。しかし、諸注釈書は、この偈をシャーンティデーヴァの主張とし、「この道」が空性の修習、「経言」が大乗經典、特に『般若經』を意味すると解するのである。その詳細は後にふれるが、このような注釈内容が与えられているのも、「菩提」を獲得させる「この道」が、小乗、大乘それぞれの修道内容を想起させるものであることに由来すると言えるだろう。

二つ目の問題は、「経言」の内容の、両本のニュアンスの違いである。

BSA31 ab 句は、*anenaiva mārgena bodhir ity āgamādeyaḥ* といった梵文であったことが想定される。したがって、この偈文では、あくまで「この道」が「菩提」の道であることを重視し強調するだけであって、必ずしも「この道」以外の修道のあり方を排除するものではない。前後の文脈から言って、アクシャヤマティにとって「この道」が空性の修習を指すことは明白である。とすれば、彼の主張が成り立つためには、「この道」が空性の修習を意味すること、さらにそれを説く大乘經典が、小乗の阿含と同様に仏説であることさえ、証明されればよい。

これに対して、BCA41ab 句の経言は「この道以外に菩提はない」というものであり、「この道」の唯一性、必然性を説くものとなっている。換言すれば、それ以外の修道のあり方を排除するものである。したがって、BCA でシャーンティデーヴァの主張が成り立つためには、BSA での証明されるべき内容である仏説性についての小乗と大乘との平等性に加えて、空性の修習以外の修道について、何らかの理由で不完全性を指摘する必要があるのである。

以上のように、ほぼ同じ内容を含む BSA31 ab 句と BCA41cd 句は、指摘した二つの問題点を抱えている。これを小乗、大乘側それぞれの修道の関係から言えば、前者は二つの修道の並列が可能である一方、後者は二者択一的な意味合いを持つ。この相違は、この後の論構成にも影響を与えていると考えられる。

## 論構成への影響

BSA の空性の修習の勸奨の部分で、それを証明するものは大乘仏説論争のみである。別稿で検討したように、BSA での大乘仏説論争は、この BSA31ab 句の内容をめぐる開始されるが、小乗側の仏説の条件は大乘にもあり、大乘非仏説の論拠があるとすれば、小乗にもあてはまる、と言う論法をとる。その中で論争を通じての論者の主張は、BSA32ab 句に表される「小乗側に阿含に対する尊敬があるなら、大乘にもなすべきである」ということのみであり、仏説性について大乘と小乗とを峻別する意図は看取されない。このような小乗と大乘の平等性に基づく論争の性格は、BCA42 偈から 44 偈までに<sup>⑨</sup>かけての第一の論争でも保たれている。しかし、平等性に基づく論法のみでは、「この道以外に」という、例外を認めない空性の修習の唯一性までは証明できない。この役割を担っていると考えられるのが、教えの内容と比丘のあり方の関係をめぐって議論し、結論として空性の修習を勸奨する「比丘性をめぐる議論」と言うべき BCA 44偈～49偈である。

この部分は、比較的まとまった内容にも関わらず、BSA には存在しない<sup>⑩</sup>。『般若章』のここまでの文脈に関して、二本を照らし合わせたとき、偈の増広、偈文の不一致はあったものの、例えば二諦説、自己認識理論批判といった、論の構成そのものは、二本とも、その配列順も含めてよく対応している。それに比すると、「比丘性をめぐる議論」という一つの主題そのものが BCA 独自のものであることは異例である。そのためか、先行研究では、文脈上不要な議論と指摘されている<sup>⑪</sup>。なお、訳にあたっては Bodhicaryāvatārapañjikā (BCAP) を参照した。

(BCA45, BSA. missing)

〔主張者 シャーンティデーヴァ〕

śāsanam bhikṣutāmulaṃ bhikṣutaiva ca duḥsthitā/V. ed. p. 206. l. 24

sāvalambanacittānām nirvāṇam api duḥsthitam//45//V. ed. p. 207. l. 27

bstan rtsa dge slong nyid yin na//

dge slong nyid kyang dka' bar gnas//

sems ni dmigs dang bcas rnams kyi//

mya ngan 'das pa'ang dka' bar gnas//Der. 32b2-3, Pek. 37a2-3

教えは比丘であることを根本とするが、所縁を伴った心を持つ者達の  
比丘であることは困難である。涅槃も、困難である。

(BCA46, BSA. missing)

〔主張者 シャーンティデーヴァ〕

kleśaprahāṇān muktis cet tad anantaram astu sã/V. ed. p. 207. l. 31

dṛṣṭaṃ ca teṣu sãmarthyam niṣkleśasyāpi karmaṇaḥ//46//V. ed. p. 208.

l. 4

nyon mongs spangs pas grol na de'i//

de ma thag tu der 'gyur ro//

nyon mongs med kyang de dag la//

las kyi nus pa mthong ba yin//Der. 32b3, Pek. 37a3-4

もし、煩惱を断ずることから解脱があるならば、その〔煩惱の断の〕  
直後に、その解脱がある筈である。なぜなら、彼ら（比丘）の中に、  
煩惱が伴わないにもかかわらず、業の効力が知られるから。

(BCA47, BSA. missing)

〔主張者 シャーンティデーヴァ〕

trṣṇā tāvad upādānaṃ nāsti cet saṃpradhāryate/V. ed. p. 208. l. 19

kim akliṣṭāpi trṣṇaiṣāṃ nāsti saṃmohavat satī//47//V. ed. p. 208. l. 23

re zhig nyer len sred pa ni//

med ces nges pa nyid ce na//

sred de nyon mongs can min yang//

kun rmongs bzhin du ci ste med//Der. 32b3-4, Pek. 37a4

もし、既に、渴愛、取がないと確定されたならば、その場合、愚癡と  
同様に、彼らに無染汚の渴愛がないとすることがどうしてあり得よう  
か。

(BCA48, BSA. missing)

〔主張者 シャーンティデーヴァ〕

vedanāpratyayā tṛṣṇā vedanaīṣām ca vidyate/V. ed. p. 208. l. 27

sālabanena cittena sthātavyaṃ yatra tatra vā//48//V. ed. p. 209. l. 6

tshor ba'i rkyen gyis sred pa yin//

tshor ba de dag la yang yod//

dmigs pa dang ni bcas pa'i sems//

'ga' zhig la ni gnas par 'gyur//Der. 32b4, Pek. 37a4-5

受を原因とする渴愛があり、また彼ら（比丘）には受がある。（彼らの）所縁を伴う心が、あれこれと〔所縁に〕従事せざるを得ない。

(BCA49, BSA. missing)

〔主張者 シャーンティデーヴァ〕

vinā śūnyatayā cittaṃ baddham utpadyate punaḥ/

yathāsaṃjñīsamāpattau bhāvayet tena śūnyatām//49// V. ed. p. 209. ll. 11-12

stong nyid dang ni bral ba'i sems//

'gags pa slar yang skye 'gyur te//

'du shes med pa'i snyoms 'jug bzhin//

des na stong nyid bsgom par bya//Der. 32b4-5, Pek. 37a5-6

空性を欠いては、心は〔所縁と〕結ばれて、〔それゆえ〕再生するのである。例えば、無想定において〔再び心が生じる〕ように。したがって、〔空性を欠いては比丘であることも得られないから〕空性を修習すべきである。

この部分は、先述の第一の論争の直後にあるのだが、議論の展開という面から言えば、大乘経典の仏説としての正当性を問題としていた前偈に比較して、教え（śāsaṇa）に言及するものの、その主題は比丘であること、更に涅槃の不確定性を主張する点で、論が飛躍している印象を与えることは確かである。続く三偈は、小乗の修道の具体的な内容を挙げ、その問題点を指摘している。そ



して最後の BCA49 偈で、それら小乗の教義を内容とする比丘であることも空性なくして成立しないことを理由として、空性の修習を勧奨している。この空性の勧奨を結論付けることは、BSA に相当偈が存在する BCA54, 55 偈の内容とも重なるものであるが、「空性を欠いては」「再生する」という内容に注意すべきであろう。

この議論において、シャーンティデーヴァの主張の中核をなしているのは、大乘の説く空性がなければ、小乗の教義、更にその根本である比丘性についても成立しない、というものである。即ち、大乘の存在を前提とし、小乗の正当性が成立するという、大乘が小乗を包含する関係にあると言える。その意味で、この比丘性をめぐる議論は、共に空性の勧奨という更に大きな主題を構成する議論でありながら、小乗と大乘の平等性に基づく仏説論争とは、明らかに異質な議論である。この議論の性格は、「この道以外に」と例外を認めず、空性の修習の唯一性を説く BCA41 偈の内容に呼応したものと考えられる。したがって、「この道以外に菩提はない」と言う内容による限り、「比丘性をめぐる議論」は、不可欠な内容であると言える。結論としての BCA49 偈は、そのことを端的に表している。

この見方は、各注釈書の内容からも裏付けられる。

代表的注釈書である BCAP は、次のように「比丘性をめぐる議論」を位置づけている。<sup>⑫</sup>

以上、(一) 答と能破の同一性を示したうえで、更に、限定によって対論者の承認に対し、論駁を示すために「シャーンティデーヴァは」仰る。

教えは比丘であることを根本とするが、比丘であることは困難である。

教えは云々によって「論駁が」始まる。教えは、世尊による利益と不利益との取捨の指示を特徴とする。そして、それが比丘であることを根本とする。

或いは又、傍論的な (ānusaṅgikī) 経典論争 (āgama-vipratipatti) を完了して、

「四聖」諦を見ることから「こそ」解脱があるが、空性を見ることに

何の必要があろうか。<sup>⑭</sup>

と言われたことに反論したいがために、教えは云々を言うのである。

ここでは、前の第一の仏説論争との内容的連関について、二つの見解が示されている。

この内、前者の「答と能破の同一〔性〕」(samāna-parihāra-dūṣaṇa [tā])<sup>⑮</sup>ということは、BCA42 偈の注釈中にも、その論争の傾向について述べられているものである。この解釈では、その部分を含む第一の仏説論争の文脈からの連続性を踏まえて、さらに「教え」と論題を限定して、論が展開していると見る。この解釈だと、「比丘性の議論」は第一の仏説論争の各論に位置づけられていることになる。

後者では、この比丘性の議論が BCA41ab 句に対する反論として了解されていること、更に第一の仏説論争を「傍論的なもの」と言っていることから、この議論を經典論争より重視していることが窺える。

なお、プトンは、仏説論争からの文脈の結びつきに関して、BCA45ab 句の注釈において、外道と論争を伴うものであるから比丘であることは困難であるというカルヤーナデーヴァの主張も取り上げる。<sup>⑯</sup>これは、外道との論争を伴うことが非仏説の証左とならないことを述べる BCA44偈の内容を受けた解釈と思われる。<sup>⑰</sup>

以上の注釈書の内容からも、大乘仏説論争から比丘性の議論への展開をいかに解釈するかに、各注釈者が苦慮していたことが窺われる。これは BCA41cd 句の内容を論証するに際して、仏説としての小乗との平等性、更にその大乘が説く空性の修習が小乗側にとっても必然であることを示さねばならないことに起因する。後者の役割を担うのが、比丘性の議論である。このような BCA の論構成を踏まえて、注釈者達も、この比丘性の議論を BCA41 偈に関連づけて注釈するのである。

以上のことを端的に示しているのが、タルマリンチェンの解釈であると考えられるが、これについては先行注釈書からの彼の解釈への影響も踏まえつつ、次に検討する。

## 各注釈書への影響

さて、BCA41 偈の持つ、大乘と小乗との平等性と、大乘の説く空性の修習の唯一性という論証されるべき問題の二重構造は、注釈書に見られる注釈家の理解そのものにも反映されている。

その一つが、前にも触れた経証と理証の問題である。これについては別稿において検討したが、BCAP は、その注釈にあたって、『般若経』の一節、さらに『般若讃』17偈を引用する。これらは、BCA41cd 句に見られる「この道以外に菩提はない」という経言の、具体的実例を示すために取り上げられていると考えられる。

このうち、前者の論旨は、「存在の想を持つ者 (saṃjñin. 'dus shes can) は、二辺に執着するから仏法の修習はなく、解脱もない」と言うこと<sup>18</sup>、三世にわたって如来・阿羅漢・等正覚が般若波羅蜜に依止して無上の三藐三菩提を獲得すること、その理由として三乗が般若波羅蜜に基づくものであることの三つに大別される。この引用部分が現行の般若経のどの部分に相当するか確定できていないが、「色」、「受」、「想」、「行」と五蘊の各要素をあげた上で、最後に「識」ではなく「道相知者性」(mārgākārajñatā) に言及している。「道相知者性」は、菩薩の道との関係で説かれ『二万五千頌』等の大品系般若経に特有の表現であり、ここで引用されている『般若経』も、大品系般若であることが推察される。<sup>20</sup> 以上が経証として示されているわけであるが、ここでは、如来、阿羅漢、等正覚が般若波羅蜜に依止するという意味での平等性が示されているものの、般若波羅蜜への依止の必然性が示されているのではないことが注意される。

これに対して後者は、作者については、西藏訳のみ現存の『中論仏護注』に『般若讃』15偈がラーフラバドラ Rāhulabhadra 作として引用されており、また諸訳の伝承の検討から彼であることが確認されているが、賛嘆部所蔵本の西藏訳コロフォン<sup>23</sup>にあるように、チベットではナーガールジュナ 作と伝えられている。何れにしても、その伝承に従えば、この引用は理証であるということが出来るが、BCAP では、その記述は見られない。<sup>24</sup>

諸仏、独覚、声聞方によって依拠されている解脱の道であるあなた〔般若波羅蜜〕は唯一であって、他はないと、確定している。

これは、前者に比して、独覚、声聞にとっても、般若波羅蜜への依拠が、解脱に必然的なものとして示されている。その意味で、後者は BCA41cd の「この道以外にない」という、他の可能性を否定する限定的な内容に相応したものであると考えられる。

この引証を含め、プラジュニャーカラマティの解釈を継承しつつ注釈内容が独自色を強めていったのは、チベット撰述注釈書に到ってからである。彼らは、プラジュニャーカラマティの引証した『般若讃』の意図には理解を示しながらも、それと同内容の経典を挙げている。その引用経典の内容から、ツォンカパ、タルマリンチェンによる声聞独覚にも法無我理解があることをシャーンティデーヴァも認めているという解釈を生むことになった<sup>25</sup>。

しかし、この理解も、BCA41cd 句の限定的な内容が前提となっている。このことは、この偈そのものに対する彼らの理解にも反映されている。

まず、この反論者の論難を設定するシャーンティデーヴァの意図について、タルマリンチェンが見解を披瀝している<sup>26</sup>。

第一は、〈BCA41ab〉ある声聞部の者曰く「四諦の無常を初めとする十六形相を現前に見ることを修習するから、解脱、阿羅漢果を得ることがあるが、一切法が諦として空性を見ることに何の用があらうか。必要はなく、不合理である。」と言うならば、ある声聞部にして仏を得るとする者についても、空性を理解すべきでないだけに限らず、法無我に関して名称すらも承認せず、大乘経典を〔仏〕説と認めない彼らが、前分の主な者であって、〔彼らの〕論難について、大乘経典は量であるのご承認されても、阿羅漢果を得ることに法無我を了解する必要はないと承認なさる彼らも否定して、空性を了解する智慧こそが、有趣から解脱する道であると証明をご承認して、これらの典籍を〔シャーンティデーヴァは〕設定したのである。

前分所破の者について、ここでは学派名を限定していないが、十六形相等への言及から見て、プラジュニャーカラマティ以来の注釈内容に基づいて、タル

マリンチェンもこの偈の前半に注釈を与えている。彼らにとっては、大乘經典は何ら權威を持たないし、法無我と言う説示の内容は承認できるものではない。この主張を述べる者を、タルマリンチェンは「前分の主な者」と言う。しかし、BCA でのこの議論が設定された理由には、彼らの主張を否定することだけでなく、大乘經典が量であることは承認しても、阿羅漢果を得ることに法無我理解が必要ないという主張を否定することも含まれるとし、間接的に阿羅漢果を得る声聞独覚にも法無我理解が必要であることを述べていると了解しているのである。したがって、その理解によれば、シャーンティデーヴァは BCA で、まず声聞独覚である阿羅漢にも大乘經典が量として、つまり仏説として成立することを証明し、その上でそこに説かれる法無我が彼らの修道上に必要であることを証明する、と二段階を経て上記の内容を主張していることになる。この理解が「この道以外に菩提はない」と言う BCA41cd 句の限定性に由来すると考えられるのである。

とすれば次に問題となるのは、この BCA41 に呼応して証明されるべき内容の二重性が、タルマリンチェンの BCA そのものの論構成に対する了解にも反映されているかということであるが、それは端的に科文と BCA との対応から確認できる。相当箇処 (K. ed), 相当 BCA 偈番号 (k.) と共に示す。<sup>⑦</sup>

4.1.2.2 解脱のみを得たいと望む者も又、空性を了悟する必要性における論証 K.ed126b6, k.41-k.57

4.1.2.2.1 論難 K.ed126b6, k.41ab

4.1.2.2.2 答 K.ed127a3, k.41cd-k.57

4.1.2.2.2.1 空性を了解する智慧そのものが有から解脱する道として証明されること (大乘仏説論争) K.ed127a4, k.41cd-k.52

4.1.2.2.2.1.1 大乘經典が仏説として経証によって証明する点から論証されること K.ed127a5, k.41cd

4.1.2.2.2.1.2 理証によって証明されること K.ed127b5, k.42-k.49 [k.50-k.52]

4.1.2.2.2.1.2.1 同類によって証明されること K.ed127b6, k.42, k.43,

k.44 (大乘仏説論争)

4.1.2.2.2.1.2.2 正しい理証による論証 K.ed128b1, k.45-k.49 (比丘性の議論) [k.50-k.52]

4.1.2.2.2.1.2.2.1 空性を了解する智慧と離れるのであれば阿羅漢と涅槃を獲得できないと言う説示 K.ed128b2, k.45

4.1.2.2.2.1.2.2.2 無常を初めとする十六の道のみによって阿羅漢を得るならば、現前している煩惱を捨てることのみによっても阿羅漢を得るという錯誤 K.ed129a1, k.46

4.1.2.2.2.1.2.2.3 その答の否定 K.ed129b4, k.47, k.48

4.1.2.2.2.1.2.2.4 したがって解脱ほどを望む者も空性を修習すべきと言う説示 K.ed130,k.49 [k.50,k.51,k.52]

以上の科文の内容からも、BCA41cd 句の証明されるべき内容の二重性に呼応して、大乘仏説論争と比丘性の議論とが配当される、という理解が窺える。この科文の上では、前者が「同類 (mgo mtshungs) によって証明されること」、後者が「正しい理証 (rnal ma'i rigs pa) による論証」と言い換えられているが、この両者の関係は、BCA 41cd 句のもつ意義を述べる次の言及にも窺える。<sup>28</sup>

この本文の二句 [BCA 41cd] は、「ある声聞部の者の心にとって、大乘〔経典〕が仏説として成立する。」と「シャーンティデーヴァが」主張して、この証明 (sgrub byed) を設定するのである。

「大乘の経証が量であると認めないならば、それについて証明として設定したことは、理証と離れたものとならない。」と「対論者が」言うならば、あらゆる証明の設定に関する因の三相は、最初から、反論者によって成立する必要性はない。ここでも、この証明の遍充は、後で、同類 (mgo mtshungs) と正しい理証 (rnal ma'i rigs pa) によって、証明されるものである。

阿闍梨「シャーンティデーヴァ」も、大乘経典を仏説と承認しない、誤った分別を否定する見解によって、これらの典籍を設定するのである。この証因の所証は、空性を了解する智慧を三つの菩提の道として証明するこ

とであるが、この遍充が成立している点から、大乘が仏説であると証明されてはいなくても、大乘が仏説として経証によって証明されることに結合することによって、罪 (kha na ma tho ba) はないのである。

この言及からも明らかなように、大乘仏説論争と比丘性の議論が、特に BCA41cd 句の内容を証明するものと了解されている。しかも、最初から反論者に大乘が仏説であることが認められている必要はなく、大乘仏説論争によって、対論者である小乗の者にとっても大乘經典が仏説であると証明され、その上で正しい理証による証明によって彼らにも「空性を了解する智慧が三つの菩提の道として」証明されればよい。したがって、この部分是对論者を説得し大乘の説く空性の修習に誘引することに焦点があるとタルマリンチェンは了解しているのである。このような了解は、大乘と小乗との平等性のみを説く BSA では不可能であり、その平等性を踏まえた上で大乘の内容の唯一性を説く BCA で初めて可能になったものと考えられる。

## ま と め

以上をまとめれば、BCA41 偈の内容は、小乗と同様に大乘が仏説であることのみならず、大乘の説く空性の修習の唯一性を証明する必要性がある。この論証の二重性が BCA そのものの論構成にも反映されている。前者を証明するものが大乘仏説論争であり、後者を証明するものが比丘性の議論である。大乘仏説論争によって、大乘が小乗と同じように仏説であると示され、それを踏まえて、比丘性の議論を通じて、その大乘の説く空性の修習が小乗のものにとっても唯一の必然的な道であることが示される。この二重構造が、各注釈者が具体的事例として取り上げる引証の仕方にも確認される。さらに、BCA が声聞独覚にも法無我理解があると認める、という、ツォンカパ、タルマリンチェンの了解に結実している。いずれにせよ、空性の修習の唯一性が示されることは、BCA の一つの特徴として指摘できよう。

参照テキスト

- BCA V. ed. *BODHICARYĀVATĀRA OF ŚĀNTIDEVA with Commenn-tary Pañjikā OF PRAJÑĀKARAMATI*  
edited by P.L. Vaidya. (*Buddhist Sanskrit Texts* No. 12) Darbhanga, 1960.  
Tib. Der. No. 3871 Pek. ed. No. 5272.
- BCAP *Bodhicaryāvatārapañjikā, Prajñākaramati's Comentary to the Bodhicaryāvatāra of Śāntideva*, ed. by Louis de La VALÉE Pous-sin, Bibliotheca Indica, Calcutta 1901-1914,  
V. ed. *BODHICARYĀVATĀRA OF ŚĀNTIDEVA with Commenn-tary Pañjikā OF PRAJÑĀKARAMATI*  
edited by P.L. Vaidya. (*Buddhist Sanskrit Texts* No. 12) Darbhanga, 1960.  
Tib. Der. No. 3872. Pek. ed. No. 5273.
- o'd gsel *Byang chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa'i 'grel pa.*; *Byang chub kyi sems gsal bar byed pa zla ba'i 'od zer.*  
*THE COLLECTED WORKS OF BU-STON PART19 (DZA)*  
Edited by LOKESH CHANDRA. (*ŚATA-PITAKA SERIES VOL. 59*) New Delhi 1971.
- rGyal sras 'jug ngogs  
*Byang chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa'i rnam bshad rGyal sras 'jug ngogs.*  
K.ed. *Collected Works (gsun hbum) of Rgyal Tshab rje Dar-ma-rin-chen.* edited by Ngawang Gelek Demo. New Delhi, 1980. (bKra shis lhun po ed.)
- SAITO [1993] AKIRA SAITO. *A STUDY OF AKṢAYAMATI'S BODHISATTVACARYĀVATĀRA as Found in the Tibetan manu-scripts from Tun-huang. Grant-in-Aid for Scietific Research(c)*
- SAITO [2000] AKIRA SAITO. *Śāntarakṣita's Satyadvayavibhaṅgapañjikā and Related Systems—A Study of the Dün-huang Reccension of the Bodhicaryāvatāra —A report of Grant-in-Aid for Scietific Research(c).*

註

- ① 代表的なものが、第九章50偈から52偈に見られる大乘仏説論争である。これにつ  
いては、櫻井智浩『『入菩提行論』第九章50～52偈の解釈をめぐって』『印仏研』第  
五十巻第一号 pp. (162)～(164) 参照。
- ② 斎藤明「敦煌出土アクシャヤマティ作『入菩薩行論』とその周辺」『チベットの



仏教と社会』(山口瑞鳳監修)春秋社, 1986, pp. 79-109。

- ③ このような観点から現行本の成立事情を推察した先駆的研究としては Chiko Ishida “Some New Remarks on the Bodhicaryāvatāra Chap. V” IBK Vol. 37, No. 1, 1988., 石田智宏「Bodhicaryāvatāra における波羅提目叉と懺悔法—改編と改訳の証跡—」『仏教史学研究』37-1, pp. 1-27. が挙げられる。これらの論攷の中で、現行本五章に見られる波羅提目叉 (pratimokṣa), それに関連して二章に見られる懺悔法の具体的内容が検討され、その二つの要因が現行本特有のものであり、それらの導入がチベットでの改訳の動機にも関わると指摘されている。
- ④ BSA では第八章, BCA では第九章にあたる。前掲齊藤論文等参照。
- ⑤ この点については、櫻井智浩『『入菩提行論』の大乗仏説論をめぐって—論争の争点と意義—』(『大谷学報』第81巻第4号に掲載予定)で取り上げた。
- ⑥ kleṣajñeyāvṛtitamaḥpratipakṣo hi śūnyatā/  
śiṅgham sarvajñatākāmo na bhāvayati tām katham//SAITO [1993] p11.  
nyon mongs pa dang shes bya'i sgrib//mun pa'i gnyen po stong pa nyid//  
myur du thams chad mkhyen 'dod na//de ni ci ste bsgom myi bya// SAITO [2000] P53.なお、前掲櫻井『大谷学報』掲載予定論文には、当該五偈の還元梵本、チベット訳、和訳を提示した。
- ⑦ SAITO [1993] p. 73 l. 19-74 l. 5, SAITO [2000] pp. 79-80.

da ni rang gi sde pa bye brag tu smra ba dag na re theg pa chen po ni sangs rgyas thob par byed pa'i lam nyid du dge slong klu sgrub la sogs pas bshad par zad kyi/sangs rgyas kyis gsungs pa ma yin pas/de'i phyir bsgom par mi bya'o zhes zer bdag gi log par rtog pa dgag pa'i phyir/lam 'di nyid kyis zhes bya ba la sogs pa smos te/man ngag brgyud pas zhes bya ba ni bcom ldan 'das kyis 'phags pa 'od srungs chen po la gtad/des kun dga' bo la gtad / des sha na'i gos can la gtad/des u pa gub ta la gtad/des mi tsha ka la gtad ces bya ba la sogs pa gsungs so//

da ni mtshungs pa nyid du bsgrub pa'i phyir khyed kyi gzhung gis zhes bya ba la sogs pa gsungs te/de lta ma yin na nyan thos pa khyed kyi gzhung gis byang chub thob par byed pa yin par sangs rgyas kyi bka' nyid du yang ji ltar 'grub ste/mtshungs so snyam du bsams pa'o//

今や、自部の毘婆沙師の者達曰く「“大乘は仏を得させる道に他ならない”と、比丘ナーガルジュナが説いたに過ぎないが、仏説ではないから、従って修習すべきでない。」と言う、誤った考えを否定するために、この道によって云々を言うのであって、世尊は、「教法の相承とは、聖マハーカーシャバに委嘱し、彼からアーナンダ・シャーナカヴァーシ・ウバグブタ・メーチャカに委嘱し、」云々をお説きになっている。

今や、平等性に基づいて論証するために、君の経論については云々を「アクシャヤマティは」おっしゃるのである。さもなくば、声聞であるあなたの典籍によって菩提を獲得せしめるものであるという仏説であることについても、どうして成立す

るのか。〔成立しない、そのことは小乗と大乘に〕等しいのである。

- ⑧ 高崎直道「大乘仏教の〈周辺〉補論 大乘非仏説の諸資料」『講座・大乘仏教10』春秋社、1985、p. 29 参照。
- ⑨ 前掲櫻井『大谷学報』掲載予定論文の「(1) BSA と BCA の大乘仏説論争の比較」を参照されたい。
- ⑩ cf. SAITO [1993] p. (25), p. (33).
- ⑪ SAITO [1993] p. (26) 等では、「文脈的に不一致であったり唐突で不要な議論」の一部として、BCA45~48偈までが指摘されている。
- ⑫ BCAP V. ed. p. 206, ll. 23-27.
- ⑬ samāna-parihāra-dūṣaṇatā, lan dang sun 'byin pa mtshungs.
- ⑭ BCA 41偈
- ⑮ V. ed. p. 208, l. 19.
- ⑯ o'd gsel. 175b4-5. このプトンの注釈についての詳細は斎藤明「プトウンと『入菩薩行論解説 [細疏]』」『印度学仏教学研究』48-2, 2000, pp. (118)-(123) 参照。ここで取り上げられるカルヤーナデーヴァの主張は『入菩薩行善会』Der. No. 3874., 73b6-7, Pek. No. 5275., 86a8-86b1 に相当する。
- ⑰ シャーンティデーヴァの主張である。savivāda という点から、BSA33 との関連が指摘される。

*savivādam mahāyānam iti ced āgamam tyaja/*

tīrthikaḥ savivādatvāt svaiḥ paraḥ cāgamāntaram//44// V. ed. p. 206. ll. 4-5

theg chen rtsod bcas\* phyir zhe na//lung la mu stegs pa\* rnamdang//

lung gzhan la yang rang gzhan dag//rtsod bcas yin phyir dor byar 'gyur//Der. la.32b2, Pek.la.37a1-2

\*Pek.bcad \*Pek.mu stegs can

大乘は論争がある、と言うならば、〔あなたの〕経言を捨てよ。

外道達と、また自分達と他者達とも論争があるから、他の経言も捨てよ。

- ⑱ V. ed. p. 203. ll. 13-28. Der. 217a2-217b5. Pek. 243b5-244b4.
- ⑲ V. ed. p. 203. l. 28-p. 204. l. 11. Der. 217b5-218a6. Pek. 244b4-245a6.
- ⑳ 兵藤一夫『般若経釈 現觀莊嚴論の研究』文栄堂、2000、pp. 45-54参照。
- ㉑ cf. Chr. Lindtner, Buddhapālita on emptiness, *Indo-Iranian Journal*, vol. 23, 1981, pp. 196, 207.
- ㉒ 宇井伯寿「羅喉羅、即、羅喉羅跋陀羅」『印度哲学研究第一』岩波書店 (repr. 1982) 参照。
- ㉓ Pek. No. 2018. 88b2-3.
- ㉔ V. ed. p. 204. ll. 13-14. Der. 218a6-7 Pek. 245a6-7
- buddhaiḥ pratyekabuddhaiḥ ca śrāvakaiḥ ca niṣevitā/  
mārgas tvam ekā mokṣasya nāsty anya iti niścaya//iti//  
sangs rgyas rnamdang rang sangs rgyas//nyan thos rnam kyis nges bsten  
pa'i//

thar lam gcig pu khyod lags te//gzhan du nges pa ma mchis so//

塚田貫康「入菩提行論細疏試訳(5)」『大崎学報』148, 1992, p. 78 注②①参照。なお、BCAP では、『般若讃』第8偈も引用されている(酒井紫朗「般若波羅蜜多讃(龍樹讃歌集4)」)『四天王寺』227, 1954, pp. 23-24, 30参照)。

- ②⑤ 以上は、櫻井智浩「『入菩提行論』第9章第41偈における引用經典 プラジュニャーカラマティ造 Bodhicaryāvatārapañjikā からタルマリンチェン造 rGyal sras 'jug ngogs までの展開」(「平成十二年度 特別研修員研究発表要旨」)『大谷学報』第八十巻第四号, 2001, pp. 43-45 でも触れている。また、タルマリンチェンの注釈の総論的記述に見られる人法二無我論については櫻井智浩「タルマリンチェン造 Bodhicaryāvatāra 注釈, rGyal sras 'jug ngogs における人法二無我論」『日本西蔵学会会報』第45号 pp. 19-30 にて検討した。

なお、ツォンカパは次のように注釈を与える。(Pek. No. 6133, ngal2a2-12a7.)

答に、経証によって否定することと、理証によって否定すること。

第一は、経言云々とは、空性を見ずに「四聖」諦を見るほどの解脱は不合理であると帰結する。経言から、空性を了解するこの道がないと三つの菩提はない。即ち獲得しないと説かれているからである。

「ここで言う」経言とは、主尊ナーガールジュナの御説示「『般若波羅蜜讃』」に、  
声聞・独覚、仏の方々によって確かに依拠されている解脱道「である」

あなたは正に一つであって、他はないと確定している。

という意味でもあるが、それだけによって十分ではないから、『十万頌般若』に、  
空性がないならば、仏とその声聞が果を獲得することはない。

と説かれることや、『集』(i.e. 『宝徳蔵般若経』)に、

この般若波羅蜜に依拠して、法王を初めとする方々は獲得すべきである。

「と説かれること」や、それと『般若心経』(sher snying)等に

この般若波羅蜜は三時の一切諸仏が赴く (bgrod pa) 唯一の道であると説かれていることなどである。

この典籍の菩提を仏のみになして、この阿闍梨の御主張は声聞・独覚によって法無我は了解されないと言う御主張である云々は、前分「所破」と関係しないから不合理である。

このうち、『般若讃』以外は、現段階で比定できていない。

- ②⑥ K.ed.ngal26b6-127a3.

- ②⑦ 『西蔵仏教基本文献第二巻 Sa-bcad of rJe yab sras gsung 'bum (2)』東洋文庫, 1997, p. 185 参照。K2~P4 迄に対応。

- ②⑧ K.ed.nga 127b2-5.